

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：14501  
研究種目：基盤研究(C) (一般)  
研究期間：2014～2016  
課題番号：26381134  
研究課題名(和文) 大学生の海外留学促進に向けた実践的施策に関する研究

研究課題名(英文) Study on Japanese Undergraduates' Study-Abroad

研究代表者  
正楽 藍 (Shoraku, Ai)  
神戸大学・国際人間科学部設置準備室・GSPコーディネーター

研究者番号：40467676  
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本の四年制以上の大学で学ぶ学部生による在学中の海外留学を彼らのキャリア形成の一環と捉えた、大学教育における日本人留学生増加へ向けた実践的施策を提示することを目的とする。まず、日本の大学における海外留学支援体制に関する全国的な現状を把握することを目的に、「学生の海外留学に関する大学調査」を、次に、日本人学生の海外留学と学生生活の状況や意識を考察するため、「大学生の海外留学と学生生活に関する調査」を実施した。両調査の結果、日本人学生は、就職の際に企業などから高く評価される海外留学の成果には、コミュニケーション力や外国語運用能力、異文化適応力があると考えられる傾向にあることが判明した。

研究成果の概要(英文)：This study explores Japanese undergraduates' intentions to study abroad and examines any education policies that encourage these students to study abroad. Two surveys, a survey of Japanese universities' internationalization and a survey of campus life for Japanese undergraduates' studying abroad were conducted, and the data were analysed both qualitatively and quantitatively. The findings of this study show that more than 75% of the universities in Japan have university-wide institutes that encourage students to study abroad, and in many cases, the institutes bear the primary responsibility for the internationalization of the universities. Second, examples of the intended learning outcomes of study-abroad courses offered by the universities include: gaining command over a foreign language, understanding different cultures, and developing communication skills. Third, the undergraduates expect that the learning outcomes of these programs will help in their career development.

研究分野：教育社会学

キーワード：海外留学 大学生 留学動機 留学成果 キャリア 学修成果

### 1. 研究開始当初の背景

日本人学生の海外留学停滞の要因を分析した研究は少なくない。これらの研究は「なぜ大学生は海外留学をためらうのか」を分析している。これらの研究では、留学にかかる経費の負担感や日本での就職活動への出遅れ感、外国語運用能力への不安感など、学生視点による要因のほか、留学先での学修成果を適切に承認する制度設計の未整備など、大学の教育体制に起因する要因が指摘されてきた。本研究では、これらの先行研究の結果を踏まえながらも、「どのようにすれば大学生の海外留学志向を高めることができるのか」を考察することとする。本研究でいう「海外留学志向」とは、「海外留学に対してどのように考えているのか」であり、主として、大学生の留学動機、つまり「大学生の海外留学はどのように動機づけられているのか」のほか、海外留学の結果としての学修成果（「大学生は海外留学によって何を獲得することができるかと考えているのか」）である。大学生の留学動機と留学による学修成果を明らかにすることにより、学生の視点による日本人留学生増加に向けた具体的かつ実践的な施策を検討することが可能となる。

### 2. 研究の目的

本研究は、日本の四年制以上の大学で学ぶ学部生による在学中の海外留学を彼らのキャリア形成の一環と捉えた、大学教育における日本人留学生増加へ向けた実践的施策を提示することを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究の初年度から二年目にかけては、日本の大学における海外留学支援体制に関する全国的な現状や趨勢を把握することを目的に、「学生の海外留学に関する大学調査」（アンケート調査、及びインタビュー調査）を実施した。

アンケート調査の対象は、日本国内すべての四年制及び六年制大学である。これらの大学の国際交流、とりわけ、学生の海外派遣を担当していると想定される部署へ調査票を郵送した。郵送先の部署数は769で、設置区分ごとの内訳は国立大学82部署、公立大学78部署、私立大学609部署である。最終の回答数は537（回答回収率69.8%）、有効回答数は535（有効回答回収率69.6%）である。調査票の質問項目は、次の通りである。1）学生の海外留学や国際交流の促進を目的とした全学組織の有無、2）学生の海外留学状況の把握、3）学生の海外留学に係る教育体制、4）その他、学生の海外留学を促す取り組み、5）海外留学支援とキャリア支援との関連である。

アンケート回答時にインタビュー調査への協力を依頼し、協力に応じると回答のあった大学のなかから、大学の規模や設置区分、立地地域等に偏りが生じないように7大学

（国立2大学（関東・中部、近畿）、私立5大学（関東（東京都）、近畿、中国・四国、九州・沖縄））を選定して訪問し、各校一名ずつの教員または職員に対する一対一の半構造化インタビューを実施した。アンケート調査への回答内容についてさらに具体的に聴くことに加えて、1）教職員が考える学生の海外留学志向、2）留学プログラムの教育的意義を高めるために留意していることについても尋ねた。

本研究の二年目から最終年度にかけては、四年制以上の大学に在学する日本人学生の海外留学と学生生活の状況や意識を考察するため、「大学生の海外留学と学生生活に関する調査」（アンケート調査、及びインタビュー調査）を実施した。

アンケート調査は、日本の四年制以上の大学に在学する日本人学生を対象とした。海外留学志向のほか、外国語による授業の受講や外国人留学生との共修への程度関わっているのかなど、日本の大学生の海外留学志向や学生生活の全体的な傾向を把握することを目的とした。アンケート回答時にインタビュー調査への協力を依頼し、協力に応じると回答のあった学生のなかから、海外留学志向の高い学生のみを抽出し、彼らの海外留学はどのように動機づけられているのか、動機づけと（海外留学の結果としての）学修成果とはどのように関連しているのかを考察した。

アンケート調査の回答数は915、インタビュー調査のそれは22である。アンケート調査では、海外留学に対してどのように考えているのか、外国語による授業の受講や外国人留学生との共修への程度関わっているのか等、日本の大学生の海外留学志向や学生生活の全体的な傾向を把握することを目的とした。インタビュー調査では、海外留学志向の高い学生のみを抽出し、彼らの海外留学はどのように動機づけられているのか、動機づけと（海外留学の結果としての）学修成果とはどのように関連しているのかを考察した。

### 4. 研究成果

(1)「学生の海外留学に関する大学調査」の結果を見ていく。学生の海外留学や国際交流の促進を目的とした全学組織（以下、全学組織）を有している大学は402校（国立大学64校（94.1%）、公立大学48校（69.6%）、私立大学290校（72.9%））である。海外留学者数を全学的に取りまとめている組織をもつ大学も多く（国立大学56校（82.4%）、公立大学46校（69.7%）、私立大学291校（74.8%））、この組織は全学組織と同一である場合がほとんどである。一部の大学で先行して実施されてきた海外留学コースの必須化を行う大学は少ないものの（必須化していない大学は、国立大学45校（66.2%）、公立大学60校（87.0%）、私立大学312校（79.4%））、海外研修や海外フィールドワークを組み込んだ授業をもつ大学は半数を超

える(国立大学 55 校(82.1%)、公立大学 36 校(52.2%)、私立大学 242 校(62.1%))。

海外留学コースの履修を必須化している大学の教育方針(アドミッションとカリキュラム、ディプロマの各ポリシー)を見てみると、海外留学は外国への興味関心を高めたり、英語力を向上させたりする機会となると捉えて留学を必須化していることが窺える。さらに、留学によって、社会の諸課題へ積極的に関わろうとする姿勢や高いコミュニケーション力を培わせようともしている。留学支援に携わる教職員に対するインタビューでも同様のことが明らかとなった。留学支援に携わる教職員は、学生は海外でのさまざまな体験からコミュニケーション力や主体性、自己への自信などを身につけられることを実感していると考えている。さらに、学生が実感している留学による学びの成果を彼らのキャリア形成へとつなげようと、留学前から留学中、帰国後に至るまで指導している大学も少なくない。

(2)次に、「大学生の海外留学と学生生活に関する調査」の結果を見ていく。大学生の海外留学の学修成果には、外国語運用能力や海外での学術的な知識のほか、異なる文化的背景を持つ人々と共働できる能力が挙げられる。大学生の海外留学動機には、外国語運用能力の獲得や海外への憧れに加えて、卒業後の進路へのつながり、より具体的には、就職や進学に際して、海外留学の学修成果が活かされたり、評価されたりするであろうという見込みが挙げられる。一方、産業界は、事業を海外展開するうえで求められる素質や能力として、海外との社会・文化、価値観の差に興味・関心を持ち、柔軟に対応する姿勢を強調する。大学生の海外留学の学修成果として議論される異文化適応力は、日本の産業界が求める能力の一つであり、他方、日本の大学生は在学中の海外経験が就職や進学に際して評価されることを期待している。つまり、日本の大学生の海外留学の学修成果として異文化適応力を追究することは、彼らが将来、その能力を活かした進路を選択する幅を広げることになるといえる。

本研究の対象となった日本人学生が考える、就職の際に企業などから高く評価される海外留学の成果には、コミュニケーション力や外国語運用能力、異文化適応力がある。

インタビュー調査によってこれらの学修成果を具体化させてみたところ、例えば、外国語運用能力に不安を持つ状態で現地の人々と意思疎通をはからなければならない状況に置かれた結果、言語以外での意思疎通のはかり方について考えられるようになったり、一方、共通言語を使える状況であれば直接対話することで問題解決をはかることができることに気づかされたりしている。さらに、日本ではよしとされていることをそのまま海外で実行してはいけないということ

であったり、日本人とほかの国や地域の人々の議論の進め方の違いであったり、知識としてわかっていることを実際に経験することによって、将来、海外とつながりのある仕事をするようになったときに直面する状況を思い描くことができている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 22 件)

正楽藍・杉野竜美・武寛子(2017)「大学の国際化における海外留学支援制度 留学促進に向けた教育体制の構築に向けて」『大学教育研究』第 25 号、pp.103-119、査読有

杉野竜美・武寛子・正楽藍(2017)「大学生の視点から見る海外留学・国際交流プログラムの課題 スキルの向上から資質の昂揚に向けて」『香川大学インターナショナルオフィスジャーナル』第 8 号、(近刊・掲載確定) 査読有

近田政博・杉野竜美(2017)「学生時代に研究指導を受けた経験が現在の研究指導に与える影響 徒弟モデルの再検証」『大学教育研究』第 25 号、pp.29-42、査読有

徳永俊太・杉野竜美(2016)「イタリアの全国学習指導要領における教育目標と評価の関係 コンピテンシーを視座として」『教育目標・評価学会紀要』第 26 号、pp.31-40、査読有

正楽藍(2016)「中等教育の拡充に影響を与える要因分析 カンボジアの前期中等教育を事例として」『国際教育協力論集』第 19 巻第 1 号、pp.29-44、査読有

利根川佳子・正楽藍(2016)「学校を基盤とする学校経営(School-based Management)への対応 カンボジアの学校支援委員会(School Support Committee)を事例として」『アジア太平洋討究』no.27、pp.179-194、査読有

杉野竜美・正楽藍・武寛子(2016)「キャリア形成の視点から見る大学生の海外留学支援体制」山内乾史・武寛子編『学修支援と高等教育の質保証( )』学文社、pp.94-110、査読無

Shoraku, Ai and Tonegawa, Yoshiko (2016) Local response to school-based management in Cambodia in the Asian context. *Journal of Kagawa University International Office*, Vol.7, pp.33-50, 査読有

武寛子(2016)「スウェーデンにおける大学教育の新しい質保証枠組みの構築に向けた動向」『大学教育研究』第 24 号、pp.87-97、査読有

杉野竜美(2015)「大学生の留学送り出し支援におけるプロセス評価 ラーニング・ポートフォリオ活用の可能性」山内乾史『学修支援と高等教育の質保証( )』学文社、pp.117-143、査読無

武寛子(2015)「スウェーデンにおける教

員養成課程の質保証に関する考察」山内乾史『学修支援と高等教育の質保証( )』学文社、pp.144-176、査読無

正楽藍(2015)「大学生の国際協力 教養科目受講生へのアンケート調査から」『香川大学インターナショナルオフィスジャーナル』第6号、pp.39-57、査読有

杉野竜美(2015)「大学生の留学支援におけるラーニング・ポートフォリオ活用の可能性」『大学教育研究』第23号、pp.89-102、査読有

近田政博・杉野竜美(2015)「アクティブラーニング型授業に対する大学生の認識 神戸大学での調査結果から」『大学教育研究』第23号、pp.1-17、査読有

杉野竜美(2015)「留学支援としてのEポートフォリオの活用 GGJ 採択の5大学の取り組み事例から」ウェブマガジン『留学交流』2015年11月号、pp.1-10、査読無

正楽藍(2015)「日本人学生の海外留学志向 留学動機と留学後のキャリアの観点から」ウェブマガジン『留学交流』2015年2月号、pp.18-30、査読無

正楽藍(2015)「大学生の国際協力」『香川大学インターナショナルオフィスジャーナル』第6号、pp.39-57、査読有

杉野竜美(2015)「大学生の留学支援におけるラーニング・ポートフォリオ活用の可能性」『大学教育研究』第23号、pp.89-102、査読有

近田政博・杉野竜美(2015)「アクティブラーニング型授業に対する大学生の認識 神戸大学での調査結果から」『大学教育研究』第23号、pp.1-17、査読有

武寛子(2015)「日本におけるIR(インスティテューショナルリサーチ)による大学教育の質保証 運用状況と制度的課題に関する比較分析」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』第5号、pp.1-10、査読有

①正楽藍(2014)「大学における短期留学プログラムに関する一考察 プログラム参加学生へのインタビュー調査から」『香川大学インターナショナルオフィスジャーナル』第5号、pp.1-19、査読有

②武寛子(2014)「スウェーデンにおける教員養成課程の質保証に関する考察」『国際協力論集』第22巻第1号、pp.55-76、査読有

〔学会発表〕(計11件)

武寛子・正楽藍・杉野竜美(2016)「大学生の留学志向と国際交流活動に関する意識調査」比較教育学会第52回大会、2016年6月26日、大阪大学(大阪府・豊中市)

正楽藍(2016)「カンボジア前期中等教育の学校改善の脆弱性に関する研究」比較教育学会第52回大会、2016年6月25日、大阪大学(大阪府・豊中市)

杉野竜美・徳永俊太(2016)「イタリアの教育改革の変遷 ヨーロッパの枠組みとの

異同」比較教育学会第52回大会、2016年6月25日、大阪大学(大阪府・豊中市)

武寛子(2016)「(課題研究) グローバル時代にけるスウェーデンの才能教育」比較教育学会第52回大会、2016年6月25日、大阪大学(大阪府・豊中市)

正楽藍・武寛子(2016)「大学生の学習意識から見るキャンパスの国際化」日本教育社会学会第68回大会、2016年9月17日、名古屋大学東山キャンパス(愛知県・名古屋市)

Shoraku, Ai and Tonegawa, Yoshiko (2015) School-Based Management in Primary Schools: The Case of Cambodia, *The International Education Development Forum 2015*, September 13, 2015, Waseda University, Tokyo(Japan)

杉野竜美・正楽藍・武寛子(2015)「大学における海外留学支援体制 大学教職員の見る大学生の海外留学」日本教育社会学会第67回大会、2015年9月10日、駒澤大学(東京都・世田谷区)

正楽藍・杉野竜美・武寛子(2015)「大学の国際化と海外留学支援制度 海外留学促進から教学支援改革に向けて」比較教育学会第51回大会、2015年6月13日、宇都宮大学(栃木県・宇都宮市)

杉野竜美・正楽藍・武寛子(2014)「大学生のキャリア展望をもとにした海外留学支援制度の在り方 日本の四年制大学におけるインタビュー調査より」比較教育学会第50回大会、2014年7月13日、名古屋大学東山キャンパス(愛知県・名古屋市)

武寛子(2014)「スウェーデンにおける教員養成課程の質保証に関する考察」比較教育学会第50回大会、2014年7月12日、名古屋大学東山キャンパス(愛知県・名古屋市)

Lrong Lim, Toru Takamizu, Mika Shioi, and Ai Shoraku (2014) "Jump-starting the Exchange Student Program between Chiang Mai University and Kagawa University: Current situations, issues, and prospects" *The 5<sup>th</sup> Chiang Mai University-Kagawa University Joint Symposium 2014*, September 10, 2014, Chiang Mai University, Chiang Mai(Thailand)

〔図書〕(計1件)

山内乾史・武寛子編(2016)『学修支援と高等教育の質保証( )』学文社、総ページ数217

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

正楽 藍 (SHORAKU, Ai)

神戸大学・国際人間科学部設置準備室・GSP  
コーディネーター

研究者番号：40467676

### (2) 研究分担者

杉野 竜美 (SUGINO, Tatsumi)

神戸大学・大学教育推進機構・特命助教  
研究者番号： 40626470

武 寛子 (TAKE, Hiroko)  
愛知教育大学・教員養成開発連携センター・講師  
研究者番号： 60578756